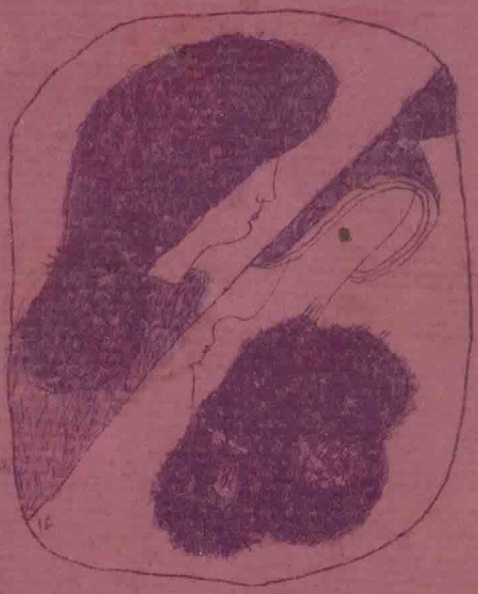
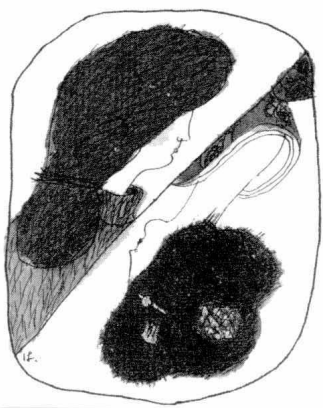
凰子

平岩弓枝



風子

平岩 弓枝



新潮社

風子

昭和五十三年一月二十日　発行
昭和五十三年三月十日　二刷

定価　九〇〇円

著者　平岩弓枝
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71
電話　業務部03(266)五一一一
編集部03(266)五四一一
振替　東京四―八〇八番
印刷　三晃印刷株式会社
製本　神田加藤製本

© by Yumie Hiraiwa, 1978, Tokyo
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

風子＊目次

芸者風子　5
風子の初恋　21
秋の中の風子　47
風子の正月　71
風子の初節句　95
五月の風子　119
ハワイの風子　143
この秋の風子　169
風子、湯の宿へ行く　191
花の下の風子　217
風子の幸せ　241

装幀　早川良雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

風

子

芸者風子

一

この店のように、夏はアイスキャンデー屋で、冬は鯛焼屋という気のきいた商売をするのが、下町にもめっきり少なくなったと思いながら、小川千代は通りすがりに鯛焼を四個買った。

つい、先だってまで一個三十円だったのが値上りして、百円玉を二枚出してお釣りが来ない。鯛焼も高くなったものだと、紙の上から触っても、まだ熱いのを受けとって、千代はその子の視線に気がついた。

鯛焼の包みを、さも羨ましそうにみつめているその娘は、せいぜい十九か二十か、色が黒くて、眼ばかり大きくみえる顔の中で、鼻と口がどっちも小さく、とがって上をむいている。よれよれのジーパンに綿シャツというのは、近頃の若い人の流行か知らないが、春とはいっても上野の桜が、まだ蕾も固いこの陽気に、おへその出そうな短い毛糸のチョッキ一枚という恰好は、うすら寒そうでもあり、物欲しげにみえた。

そう思ったとたんに、

「それがお師匠さんのいいところだけども、欠点なんですから……」

よくよく注意してくれと、かねがね一緒に暮している新堀玉子からいわれている千代の癖が出て、

「あんた、鯛焼食べたいんだろ。よかったらおあがりよ」

紙包みごと、ひょいと女の子の手に乗せて、そのまま鯛焼屋へ逆戻り、
「ちょいと、もう二百円頂戴な」
と声をかけておいてぷりむくと、娘はなんともいいようのない表情で、まじまじと千代をみつめている。
「気にしなくっていいんだよ。あたしもね、あんたぐらいの年頃の時、鯛焼屋の前を通ると旨そうな匂いがする。買って食べたいけど、あいにくお金がなくって、あんたみたいに立ってたおぼえがあるのさ。かまわないから、おあがりな」
別に買った鯛焼の包みを袖に抱いて歩き出すと、娘はなにもいわずに見送っている。
いい気分で千代は歩いていた。家へ帰って新堀玉子に話したら、
「冗談じゃありませんよ。近頃の若い人は怖いんですからね。乞食じゃないんだ、馬鹿にするなってぶんなぐられでもしたら、どうするんですよ」
などといわれそうであった。
「ふん、近頃の若い人だって、なにもみんながみんなお玉さんのいうようなのばっかりじゃないわよ」
風体は汚なかったが、いい眼をしていたっけと、これも機嫌のいい時の癖で、梅は咲いたか、桜はまだかいな、と鼻歌まじりに横断歩道へ出ようとすると、後から来た男が、
「危ねえ、ごめんよ」
千代の肩を左手で突いて、そのままどんどん駈けて行く。危ないのはそっちじゃないかと思いながら、道路を横切って湯島のほうへ歩いて行くと、背後から小母さん、小母さんと呼ぶ声がする。まさか自分のことではあるまいとそれでも気になって足を止めてみると、さっきのジーパンの娘が息を切らして追いかけてくる。下手をすると、これは鯛焼を与えたことに文句をつけに来

たのかと、千代は気持を身がまえた。
「小母さん、ハンドバッグがあいてるよ」
いきなりいわれて、思わずあっといった。ハンドバッグの口金がぱっくり開いていて、そこに入っていた更紗の紙入れがみえない。
「これじゃない。小母さんの」
眼の前に、その財布が突き出された。
「掏摸にやられたんだよ」
「掏摸……」
「さっき、男がぶつかったろう」
ああ、そうだったと思い、千代は紙入れをあけてみた。今月の生活費に銀行で十万円、おろして来たばかりである。
「あるかい、お金……」
心配そうに娘がいった。
「あるわ。一枚もとられてない」
よかったね、といい相手は豆狸が笑ったような顔をした。
「どうしたのよ。あんた、これ……」
「掏摸から、すりかえして来たのよ」
「すりかえす……じゃ、あんたも掏摸……」
「違いますよ。あたしのは手妻……」
豆狸が又、くすんと笑う、笑うと愛敬があって、なんともいい顔であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二

新堀玉子というのは、昔、千代の母親が芸者をしていて、千代もお酌で出ている時分に、芸者にしてやってくれと知人から頼まれてあずかった女で、年は千代より三つ下だった。

昔は芸者になりたいといっても、素人をそのままお座敷に出すわけはなく、一通り、芸事を仕込んで、お披露目をして、はじめて検番に名札が下るのだが、どういうのか、玉子は芸事にむいていなかった。三味線が駄目、唄が駄目、踊りを習わせると、花柳のお師匠さんから、

「いい加減にあきらめて頂戴、あたしは猿公に踊り教えてるんじゃないんだから……」

とことわられた。さらばとお囃子の師匠のところへやってみると、

「うちは八木節、教えてるわけじゃない」

と見放され、当人も、あたしは賑やかなお座敷へ着物着て、帯しめて出る気はしません。どうか、この家の女中にして下さい、といい出した。

成程、器量は十人並みだが、肩が張っていて、胸とお尻が西洋の女みたいに出っぱっているから、着物の似合う体型ではなく、無理に着せると、衣紋掛が突っ立っているようで、色気のないことおびただしい。

そのかわり、掃除や洗濯は、下に魔という字がつくほど大好きで、くりくりとよく働く。

結局、芸者にはならず、そのまま芸者屋に住み込んで、千代の母が死んだ今も、お手伝いとして暮している。

お手伝いとはいっても、主人の千代とは十五、六から姉妹のように育ったし、どっちもみよりたよりの薄いほうだから、遠慮なしにいいたいことをいい、喧嘩をしても後に残らない女二人の生活が続いている。

その玉子が、娘を連れて帰って来た千代をみて、猛然と怒り出した。
「いい加減にして下さいよ。どこの馬の骨ともつかないのを連れて来ちゃって……大体、掏摸にすられるってのは、間抜けな顔して歩いてるからですよ。だから、銀行へは私が行きますってのを、ふらふら出かけるんだから」
ひょっとすると、掏摸の仲間じゃないか、と想像が飛躍する。
「違いますよ。山中温泉から出て来て、浅草のラーメン屋で働いてたけど、仲間が意地悪ばっかりするんで頭に来て、今朝とび出して来ちゃったんだって……」
嘘だと思ったら、ラーメン屋へ電話してきいてごらんと千代がいうと、傍できいていた娘がラーメン屋の電話番号を書いてよこした。
別に玉子の悪態に腹を立てるふうもなく、物珍しそうに部屋を眺め、千代にもらった鯛焼を食べている。
ダイヤルを廻していた玉子が、
「ちょいと、その子の名前、なんてんです」
「訊いてなかったっけ。あんたの名前……」
「中山風子です。風の子って書いて、ふうこって読むんです」
「へえ、あたしは小川千代、この人は、新堀玉子、怒りっぽいけど、根は善人でね」
千代が喋っている中に、苛々と電話をしていた玉子が受話器をおいて、
「あんた、店の主人が怒ってるわよ。月給やったら、とたんにやめちゃったって」
「だって一カ月働いた分ですもの。もらって辞めなきゃ、あたしが損しちゃう……」
「そりゃそうだわよ。あんた、いくつ」
「二十よ。成人式すんでるんだから、自分の意志でなにしてもいいのよ。但し、自分で責任持た

ないとね」
「しっかりしてるんだねえ」
「小母さん、いくつ……」
「あたしは五十八、大正六年生れの巳年だわよ」
「若いなあ。あたし、せいぜい、五十そこそこだと思ったわ」
「ありがとう。お玉さんは五十五よ。大正九年生れの申年……」
「それにしちゃ老けてるわ。小母さんより年上にみえるもん……」
「ふっふっふ」
千代が機嫌がよくなればなる分だけ、玉子は忌々しい顔になって、
「どうするんですよ、こんな変な子、拾って来ちゃって……」
「うるさいわね。とっとと鍋焼うどんでも作ったらどうなのさ」
「早く仕度しないとお座敷、間に合いませんよ」
「わかってますよ」
久しぶりに、千代の三味線を訊くお座敷であった。普段はせいぜい、踊りの余興の地方をつとめるのだが、たまに粋なお客があって、三味線お千代と仇名のある、如何にも芸人らしい三味線をきかせるお千代の芸を聞きに花柳界へ遊びに来る。今夜のお座敷はその御常連であった。
鏡台の前へすわって水白粉で化粧をはじめた千代を風子は面白そうに眺めている。
化粧が出来、玉子が手伝ってお座敷着に着かえて、鬘をつけて立ち上ると、またたきもしないでみていた風子が大きく嘆息をついた。
「やっぱり、東京だね」
山中で随分、芸者をみたけれども、これだけ貫禄のある人は居なかったという。

「あんた、山中の生れかい」
「金沢です」
親が夫婦別れをして、母親が親類を頼って山中温泉へ来て、旅館の女中をしていたらしい。
一万円札を御祝儀袋に入れて、十万円とり戻してもらった礼だといって渡し、千代は三味線を出して、今夜、弾く長唄をざっとさらった。風子は鍋焼うどんを食べかけにして、うっとりときいている。
「それじゃ、あたしは商売してくるから、ゆっくりしてっていいわよ」
玉子は気味悪がったが、千代のほうはもうこれから勤めるお座敷のことで頭が一杯で、さっさと家をとび出してしまった。
「三吉野」という料亭で、思う存分、三味線を弾いて、いい気分でお帳場へ戻ってくると、
「あんた、内弟子とったんだって……」
お内儀の繁子が変な顔をした。
「内弟子……」
「お師匠さんの三味線きかしてくれって、あんたの三味線箱抱えて、ずっと廊下にすわってたけど……」
どうでもいいようなもんだけど、連れて歩くなら、ジーパンに綿シャツじゃみっともないわよ、といわれて、千代はあっと気がついた。
「あの子が来てるの」
「いい指してるわ、流石に三味線お千代さんが眼をつけるだけのことはあると思ったけど」
当人にその気があるなら、当分、見習でお座敷に出してもいいじゃないか、という。
「どっちみち、手が足りないんだし、あの子だって、おこづかいになるんじゃないの」

その風子は裏口に、ぽつんと待っていた。
「あんた、きいてたんだって……」
笑いながら声をかけると、嬉しそうに寄って来て、
「小母さんは三味線持たせたら日本一なんだってね」
玉子に訊いたといった。
「冗談じゃないよ、日本一にはまだまだ階段かけ上らなけりゃ……」
「あたし、弟子になれないかな」
山中にいる時、あんたの手は三味線にむいているといわれたことがあると、その手を千代の前へ出した。
成程、指の長い、しっかりしたいい手をしている。
「いい手だけじゃ、芸事は出来ないんだよ」
三味線、好きかい、と訊くと、風子はうなずいた。
「さっき、小母さんの三味線きいてて、頭の中がしびれたみたいになっちゃったんだ」
ずっと以前にレコードで有名な黒人のジャズの演奏をきいた時、やはり、そういう状態になったことがあるという。
「変なのと一緒にするんだね」
笑ったが、千代はこの子の内部にある音への感覚を嗅ぎとっていた。
「まあ、いいや、二、三カ月、居候をしておいで……」

三

教えてみると、成程、好きだというだけあって、風子は筋がよかった。稽古にも熱心だし、気

がむくと一日中、三味線を抱えていたりする。
ただ、千代も玉子もびっくりしたのは、この子のジャズ狂であった。
居候をきめて三日ほどの中に、三、四枚のレコードを買って来たのが、どれもアメリカの黒人ジャズ演奏家のもので、三味線に飽きると、そのレコードを何十回でもかけて、きいている。
千代も玉子も西洋の音楽にはどっちかというと拒否反応の強いほうだから、これには参った。
広くもない家の中で、ボリュウム一杯にあげてジャズをきかされては、二人とも頭ががんがんしてしまう。たまりかねて、千代が叱言をいうと、
「可笑しいね、小母さんほどの音楽家に、この音楽がわかんないわけないけどね」
それからは押入れの中へレコードを持ち込んできいている。
一カ月ほどしてから、三吉野のお内儀のすすめもあり、当人もその気があるので、見習で、お座敷に出すことになり、そうなるからには、風子の親許に一応の了解も得なければと律義な千代は、山中温泉へ旅立った。
風子の話だと、母親は昨年の秋に死んで、身よりというのは、母親の兄に当るのが、山中で土産物屋をしているという。
「知りませんよ。いいように利用されて、ドロンされたって……」
玉子は徹頭徹尾、反対だった。
昔のように、芸者屋が借金で芸者を縛っておける時代ではない。裸で芸者屋へとび込んで来て芸者になりたいというから、お披露目の衣裳から挨拶まわりの手拭まで、そっくり立替えてやったというのに、借金も返さない中に無断で廃業したり、ひどいのになるとお披露目の衣裳だけさらってドロンをきめ込む女もいる。
今までに、さんざんそういう経験をしているだけに、玉子が反対するのも無理ではないと思い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com